

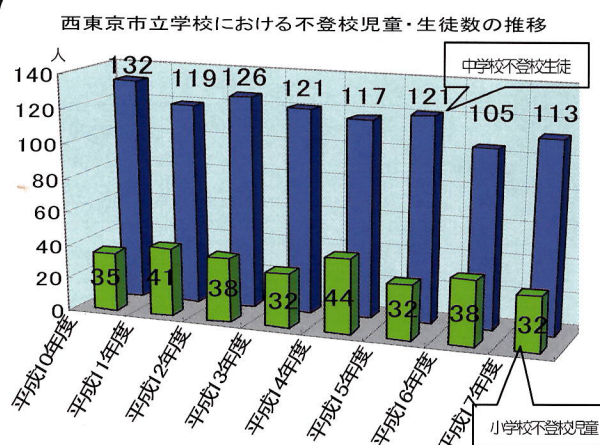
はじめよう

不登校未然防止

の取組み

— 小・中連携による中1への対応 —

西東京市立学校における不登校の現状



西東京市における不登校児童・生徒数の推移をみると、ここ数年微減傾向にあります。全体としてはほぼ横ばい状態です。特に注目すべき点は、

- ・ 中学校の不登校生徒数は、小学校の不登校児童数に比べて大幅に増加する（小学校での不登校児童の出現率は、約0.3%、中学校での不登校生徒の出現率は、約3%）。
- ・ 小学校の不登校児童数が増加した翌年に中学校の不登校生徒数が増加する。

などが挙げられます。これらは、西東京市の課題であると言えます。小学校段階での不登校及び不登校傾向が、中学校においても継続していることが課題の主な原因であると考えられます。



西東京市教育委員会

西東京市立学校の不登校の現状における課題

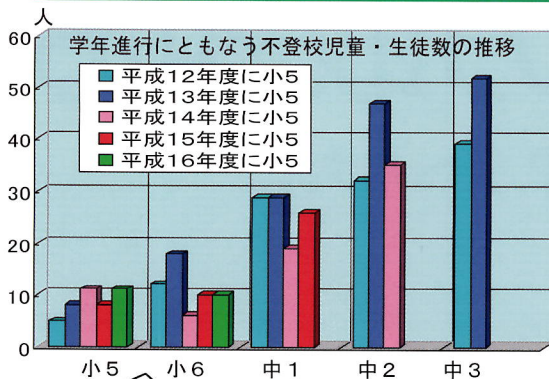
全国的にみても、小学校6年生から中学校1年生にかけて、不登校児童・生徒数が3倍前後も増加する傾向にあります（国立教育政策研究所生徒指導センターより）。西東京市においても、いわゆる「中1ギャップ」と呼ばれる傾向があり、小学校での欠席日数だけでなく、遅刻・早退や保健室等別室登校を含めてとらえ直すと、小学校の時に不登校傾向があることが分かってきました。（※「中1ギャップ」：中学1年生になって、学習や生活の環境になじまず、不登校やいじめ、暴力行為など問題行動等が急増する現象）

課題1

小学校から中学校にかけて、不登校の子どもが3倍前後に増加する。

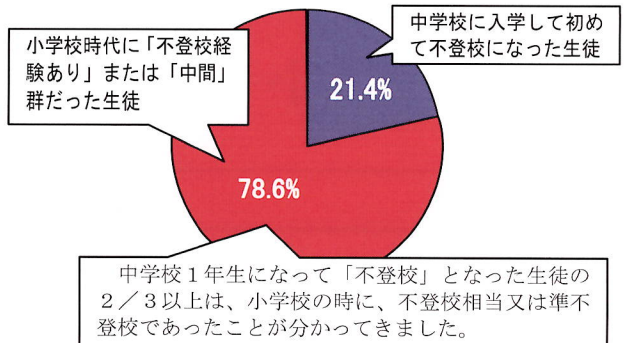
課題2

中学校で不登校となる生徒は、小学校で「不登校経験あり」群の子どもに多い。



どの年度の児童・生徒にも、小学校から中学校にかけて3倍前後に増加する同様な傾向が見られます。小学校と中学校とが密接に連携して不登校未然防止に取り組むことが重要です。

小学校「不登校経験あり」群と中1不登校生徒との関係



中学校1年生になって「不登校」となった生徒の2/3以上は、小学校の時に、不登校相当又は準不登校であったことが分かってきました。

西東京市立学校不登校対策モデル校データによる

西東京市教育委員会調べ(平成18年度)

西東京市立学校における不登校対策の方針

方針1

小・中の連携を強化した取り組みを行い、不登校生徒の減少をめざします。

方針2

不登校経験のある生徒への具体的な早期対応を図り、中1段階での不登校の未然防止に取り組めます。

中一不登校未然防止の取り組みを始めましょう！

不登校状況の分類

- 「不登校経験あり」群・・・小学校4～6年生の3年間に一度でも「不登校相当」に該当した者
・小学校4～6年生の3年間とも「準不登校」に該当した者
- 「中間」群・・・小学校4～6年生の3年間に一度でも「準不登校」に該当した者
- 「不登校経験なし」群・・・上記以外の者

【不登校相当等の計算式】

不登校相当＝欠席日数＋保健室等別室登校日数＋（遅刻・早退日数÷2）＝30日以上

準不登校＝欠席日数＋保健室等別室登校日数＋（遅刻・早退日数÷2）＝15日以上30日未満

<国立教育政策研究所 生徒指導研究センター「中1不登校生徒調査（中間報告）」による>

関係機関との連携

<主な連絡先>

教育相談センター（西東京市役所保谷庁舎）	042-438-4077
教育指導課（西東京市役所保谷庁舎）	042-438-4075
子ども家庭支援センター「のどか」	042-439-0081
東京都教育相談センター	03-5800-8008
小平児童相談所	042-467-3711



西東京市立学校の中一不登校未然防止の取組み(概要)

基本姿勢

不登校増加の背景

価値観の多様化
家族機能の変化
対人関係能力の低下

いま必要なこと

安心感をはぐくむ
基本的信頼感*をはぐくむ

育つ力

自分で葛藤を解決する力
自らの道を切り拓く力
耐性(学習や対人関係を継続させる力)

このような子どもたちに対して、学校は、家庭とともに、「安心感」、「基本的信頼感」をはぐくむ機能を果たす役割をもっています。そのためには、次のことが大切です。

- 担任等の教員と保護者とが、生徒にとってモデルとなる大人同士の関係をつくる
- 担任が一人で抱えず、信頼して支え合える学校の体制をつくる
- 中学校では、入学時の対人関係への配慮を行う

*基本的信頼感：人間関係を支える信頼感、乳幼児期からの親の愛情等により確立され、社会へ適応するための基盤となる。

取組みの概要

小学校

ステップ 1 小学校での取組み

基本的信頼感をはぐくむ

基礎的・基本的な学習内容の
定着を図り学習意欲を育てる

不登校サインを見逃さない

ステップ 2 小・中の連携の取組み

欠席状況分析シートの作成
4～6年生での欠席・遅刻・早退・別室登校日数の入力

「不登校経験あり」の児童

小中連携シートの作成
「不登校経験あり」群の児童の
基礎データ票の作成

ステップ 3 中1の4月当初の対応

欠席状況分析シートを入力

対人関係への配慮
欠席2日目に対応チーム

未然防止シートの活用

ステップ 4 中1の1学期と夏季休業中の対応

学習面の改善

「不登校経験あり」の生徒

対人関係の改善

夏季休業前や夏季休業中の取組み

年間入力

対応記録を蓄積

ステップ 5 2学期以降の対応

連続欠席での対応

不登校になってしまった生徒への対応

ステップ 1

小学校での取組み

基本的信頼感をはぐくむ

児童自身が「大事にされている」「愛されている」と実感できることで基本的信頼感がはぐくまれます。授業中や休み時間での教師との会話やふれ合いを増やし、日常的に個別にかかわるようにしましょう。

基礎的・基本的な学習内容の定着を図り学習意欲を高める

つまづいている学習内容を早期に発見し、個別指導や一人一人の児童の実態に応じた学習活動を授業中の一斉指導の中で展開したり、放課後等において個別に指導したりしましょう。学習に対して「分かった」「できた」という実感をもたせることで、学習への意欲を喚起していきましょう。

不登校のサイン

不登校サインを見逃さない

生活面 (例)

- ▽ 休日の翌日の欠席が多くなる。遅刻・早退が増える。
- ▽ 「風邪」の欠席が続く、または断続的に繰り返される。
- ▽ 特定の教科の日に欠席する。
- ▽ 身だしなみ（服・爪・髪等）の乱れが目立つ。机のまわりが散らかる。忘れ物が増える。
- ▽ 給食をとれなくなる。
- ▽ 授業中によく寝る、体育の見学が増える。

身体・生理面 (例)

- ▽ どこかが痛いと訴える。保健室へ行きたがるようになる。
- ▽ トイレに行く頻度が多くなる。
- ▽ 頭痛・腹痛・発熱・下痢・嘔吐等の訴えが増える。

対人関係面 (例)

- ▽ ささいなことでもすぐにかっとなることが多くなる。
- ▽ 乱暴なことばや行動、投げやりな態度、反抗的な態度等が増える。
- ▽ 同級生と遊ばずに下級生と遊ぶことが多くなる。
- ▽ わざとらしい振る舞いをして目立とうとすることが多くなる。
- ▽ 口数や笑顔が少なくなったり、泣くことが多くなったりする。
- ▽ グループから離れて一人であることが増える。



不登校に陥りやすい子どもの特徴 (例)

- ▽ 用事がなくても担任のそばへ来たり、ささいなことにこだわり、担任に訴えたりする。
- ▽ コミュニケーションが不得意である。
- ▽ 一人を好む。
- ▽ 日常的に集団行動に課題がある。
- ▽ マイペースである。



対応例

- 休み始めた子どもの学校生活の状況や家庭の状況を知る（定期的な家庭訪問や面談）。
- 子どもの思いを聞き、言葉にならない思いをくみとる。
- 保護者に学校の様子を伝えるとともに、保護者の話に耳を傾け、気持ちを受け止める。
- きめ細かく気遣い、大人や学校への信頼感を育てる（自己存在感のもてる学級経営）。
- 一般的な指導方法に限定せず、状況に合った柔軟な対応を図る。
- 担任一人で抱え込まず、学年・学校で情報を共有し、他の教員や訪問カウンセラーと連携する。

ステップ 2

小・中の連携の取組み

小・中学校間で確実に「引き継ぎ」を行うことで、中学校では、小学校での指導の蓄積を生かすことができます。中学校入学前に、不登校未然防止という観点で、小学校時の情報が確実に中学校教員やスクールカウンセラーと共有されることが大切です。

欠席状況分析シートの作成

小6段階で不登校傾向にあった児童の中には、入学式前に本人・保護者が中学校の管理職や養護教諭等と面識をもつことで、迎えられたと実感し、安心して登校できる場合もあります

ア 6年生(卒業生)全児童の氏名を入力する

<3月まで>

「欠席状況分析シート」に、6年生卒業時の全児童の氏名を入力する。名簿の整理番号が、中学校まで引き継がれる。
(例：19-1-02-001 = 平成19年度中学校入学、1小学校、02学校行政番号、001出席番号)

イ 4～6年生の欠席日数を入力する

<3月下旬まで>

4～6年生の「欠席日数」「欠席の理由」を入力する。(例：風邪2日、腹痛5日)

ウ 遅刻、早退、保健室等別室登校した日数を入力する

<3月下旬まで>

4～6年生の「遅刻」「早退」「別室登校」の日数を入力する。イ・ウを入力すると、「不登校相当」または「準不登校」に該当した児童の欄にマークが入り、注意を要する児童が分かる。

「不登校経験あり」群と「中間」群の判別

小中連携シートの作成

エ 「小中連携シート」を作成する

<3月末>

「不登校経験あり」群と「中間」群の生徒に対して

「小中連携シート」を作成

表面 6年担任が「本人の登校に対する意識」「本人の行動・様子」等の項目について、該当する項目にチェックする。特記事項には、中学校の指導・対応に役に立つ内容をできる限り記述する。

裏面 4～6年の各学年ごとの「不登校になったきっかけ」と「不登校状態が継続した理由」を記入する。各学年当時の担任や養護教諭など、かかわりの深かった先生が事実に基づいて記入する。記入者氏名も明記する。

小中連携シート				取扱注意			
整理番号	氏名	学年	性別	欠席状況	小4	小5	小6
小学校	XXXXXXXXXX	6年	男	欠席			
中学校	XXXXXXXXXX	1年	男	準不登校			
本人の登校に対する意識				欠席理由			
<input type="checkbox"/> 積極的 <input type="checkbox"/> どちらともいえない <input type="checkbox"/> 消極的				<input type="checkbox"/> 欠席理由不明 <input type="checkbox"/> 体調不良 <input type="checkbox"/> 不登校経験あり			
本人の行動・様子				その他特記事項			
<input type="checkbox"/> まじめである <input type="checkbox"/> 周りの言葉に敏感である <input type="checkbox"/> 健康面> <input type="checkbox"/> 友達が多い <input type="checkbox"/> 感情の起伏が激しい <input type="checkbox"/> 体調不良で保健室の利用が多い <input type="checkbox"/> 楽観的である <input type="checkbox"/> 頑張ることができる <input type="checkbox"/> 性別に理由がなく、保健室による立ちこる <input type="checkbox"/> 孤立感がある <input type="checkbox"/> 不快な感情を表現することが苦手である <input type="checkbox"/> 不登校のような様子がよく見られる <input type="checkbox"/> 内向的である <input type="checkbox"/> 友人とのかわりが少ない <input type="checkbox"/> 自信に欠けている、また謙遜している <input type="checkbox"/> おとなしい <input type="checkbox"/> 興味・関心(特に集団での活動)を好まない <input type="checkbox"/> 家庭を休んでいる様子が見える <input type="checkbox"/> 緊張しやすい <input type="checkbox"/> 人の気持ちを理解することが苦手である <input type="checkbox"/> 相談室によく行く <input type="checkbox"/> 読書好きである <input type="checkbox"/> 新しい環境が苦手である <input type="checkbox"/> 大きな病気や入院などの既往歴* <input type="checkbox"/> 落ちつきがない <input type="checkbox"/> ひとと人に対して攻撃的である <input type="checkbox"/> 静やかである <input type="checkbox"/> 自己中心性がある <input type="checkbox"/> 陰気な				*その他 特記事項* *これまでの相談歴(相談所・病院等)* *その他 特記事項*			
経歴				その他 特記事項			
<input type="checkbox"/> 乳児期、言葉が出るのが遅かった <input type="checkbox"/> 母親以外の人が主な養育者だった <input type="checkbox"/> 発達障害・医学的診断で心配された事柄があった <input type="checkbox"/> 別居時(両親の離婚、転居など)をした				*その他 特記事項*			
基本的な習慣				その他 特記事項			
<input type="checkbox"/> 基本的な習慣が身に付いていない(部屋の整理・挨拶・衣服等) <input type="checkbox"/> 夜遅くまで起きていることが多い <input type="checkbox"/> 家庭内であまり口を利かない <input type="checkbox"/> 顔にわがままを言うことが多い <input type="checkbox"/> 外遊びがなく、家の中で遊ぶことが多い <input type="checkbox"/> 保護者と学校教員に対して協力的でない、関心が薄い				*その他 特記事項*			
学力面での特徴				その他 特記事項			
<input type="checkbox"/> 好きな教科： <input type="checkbox"/> 嫌いな教科： <input type="checkbox"/> 授業への参加がなく、ぼんやりしている <input type="checkbox"/> 授業中、集中力に欠け、落ちついて課題に取り組めない <input type="checkbox"/> 学習用具等の忘れ物が多い <input type="checkbox"/> 特定の教科がある日の欠席が多い <input type="checkbox"/> 学習意欲が低い				*その他 特記事項*			
(記入者名:)							

小学校卒業時に「欠席状況分析シート」から「小中連携シート」を作成することで、小中の連携の強化に役立ちます。

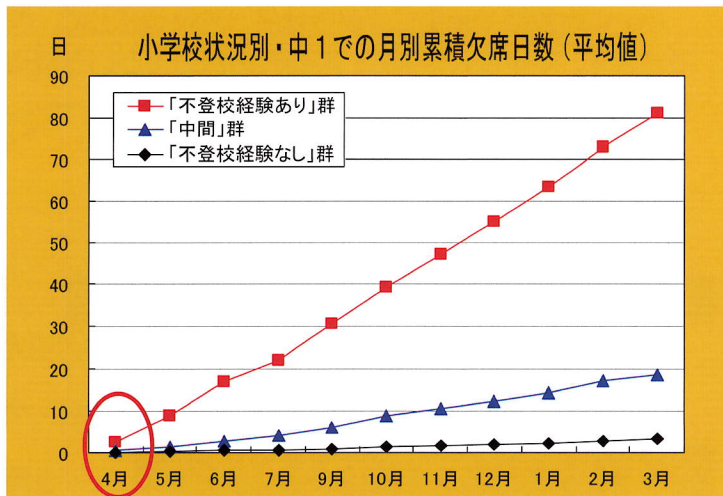
6年担任の情報提供が小中連携のカギ

不登校傾向のある児童の基礎的な情報を中学校へ

ステップ 3

小学校時代に「不登校経験あり」群の生徒は、4月当初から欠席をする傾向があります。しかし、逆にみると、小学校時代で長期の不登校であっても、中学校入学式や4月当初に登校を再開していることが分かります。

そこで、「不登校経験あり」群の生徒の、新しい環境での不安を軽減できるよう、中1の4月の段階で、下記のような学級編成や学級開きの配慮をします。また、欠席の理由が病気の場合でも、早目に適切な対応を開始します。そのことで、担任と生徒との間に信頼関係が築かれ、不登校へ結び付かずに済む場合があります、不登校未然防止につながります。



西東京市立学校不登校対策モデル校データによる
西東京市教育委員会調べ(平成18年度)

対人関係への配慮

1 学級編成を工夫する(4月当初)

「不登校経験あり」群の生徒の友人関係や小学校時の教員の働きかけの状況などを踏まえて、学級編成や学級担任を決めていきます。学級や学年だけでなく、中学校の教科担任制の利点を生かして、全教職員が共通理解し、学校全体で未然防止に取り組む姿勢を確認しておきましょう。

2 学級開き・学級づくりの工夫をする

生徒の緊張をほぐすようなレクリエーション・自己紹介・グループエンカウンターなどの「学級開き」を行う工夫をしましょう。学級だけでなく、学年集会や生徒会等で人間関係を構築する活動を行い、中学校生活に対する不安を取り除くように配慮しましょう。

「不登校経験あり」群への対応<未然防止シートの活用>

▽ 右図の「未然防止シート」を該当生徒分作成し、校内の所定の場所に保管します。欠席した期日を記入していき、対応した場合はその都度記入して、継続的に記録の蓄積を行います。

▽ 「不登校経験あり群」の生徒の欠席には、理由によらず、1日目に担任から電話などで様子を確認し、2日目になった時点で対応チームを発足させます。

未然防止シート		中学校	年	組	出席番号				
生徒氏名	担任氏名	保護者氏名	養護教諭						
欠席した期日及び日数		対応内容			対応方針				
月	日	日数	対応なし	電話あり	電話なし	学校訪問	本人面談	保護者面談	その他



対応チームの発足

- ① 「不登校経験あり」群の生徒が、月の欠席日数が累積2日となったら対応チームを発足させる。
- ② チームメンバーは、管理職、担任、養護教諭、スクールカウンセラー、生活指導主任等で構成する。
- ③ 対応チームの話し合いでは、本人や保護者との対応、その反応等について共通理解して記録する。
- ④ 「小中連携シート」で小学校での不登校の継続理由を確認する。
- ⑤ スクールカウンセラーによる「見立て」とそれに応じた対応責任者の決定、具体的に対応するための役割分担を行う。
- ⑥ 発足後、週1回程度のチーム会議をもつ。

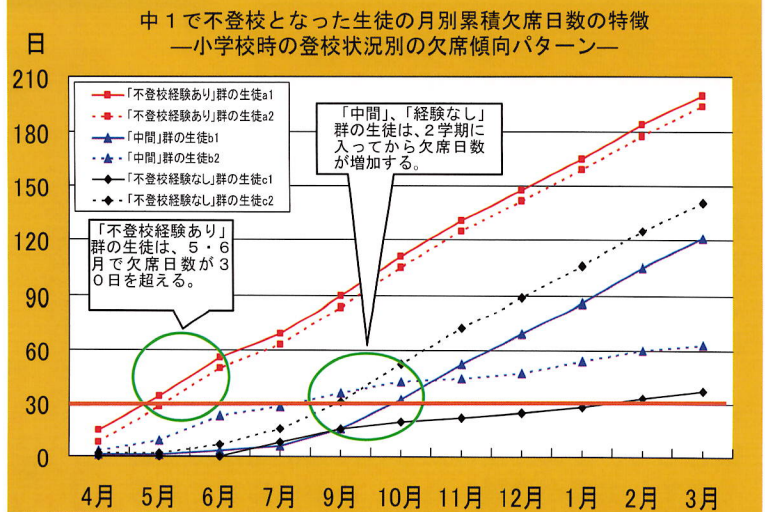
ステップ 4

中1の1学期と夏季休業中の対応

中1で不登校となった生徒の累積欠席日数をみると、小学校時代に「不登校経験あり」群であった生徒の多くが、5・6月で欠席日数が30日を超えてしまいます。つまり、1学期のうちに「不登校経験あり」群の生徒への十分な対応を行うことが不登校未然防止の取組みとして重要になります。

対人関係の改善

対人関係を構築できないことが理由で不登校傾向に陥ることのないよう、生徒の実態や必要に応じて、苦手意識を克服できるような指導や環境整備を行いましょ。



西東京市立学校不登校対策モデル校データによる
西東京市教育委員会調べ（平成18年度）

- 登校したときに複数の教員で様子を見たり、声をかけたりする。
- 本人が対人関係づくりに苦手意識をもっていることを理解し、克服できるようにする。
- 温かい学級・学年の雰囲気を醸成し、「心の居場所」を確保する。
- 子どもが主体的に取り組む共同的な活動を「絆づくりの場」として積極的に設定し、自ら「絆」を獲得させ、社会性を身に付けさせる。



学習面の改善

学業不振が理由で不登校傾向に陥ることのないよう、生徒の実態や必要に応じて、学期中や夏季休業日を利用して補習授業等を行いましょ。

- 個に応じたきめ細かい指導を行い、分かる授業を展開する。
- 生徒と相談しながら、放課後や家庭学習等の学習計画を立てる。
- 必要に応じて補習授業を設定して、参加をうながす。
- 学習相談日を設定して、学習に関する相談に応じる。
- 必要に応じて家庭訪問を行い、学習状況を確認する。



夏季休業前や夏季休業中の取組み

「不登校経験あり」群の生徒はもちろん、「中間」群や「経験なし」群の生徒であっても、1学期中に欠席が目立つ生徒に関しては、夏季休業日に入る前までや夏季休業中に対応を図ります。そのことにより、2学期始めの円滑なスタートや2学期からの不登校未然防止としての効果が期待できます。

- 生徒と相談しながら夏季休業中の計画を立て、過ごし方の約束をする。
- 学業不振の生徒に対して補習授業を設定し、参加をうながす。
- 部活動等で登校する日を確認したり、登校する日を決めたりする。
- 手紙や葉書、電話等で連絡を取り合い、関係が途絶えないようにする。
- 悩みごとや困ったことがあった時の相談方法について話し合う。
- 1学期の様子を話題にして、家庭訪問等で生徒や保護者と面談する。
- 欠席の理由の背景を校内で十分に検討しておく。



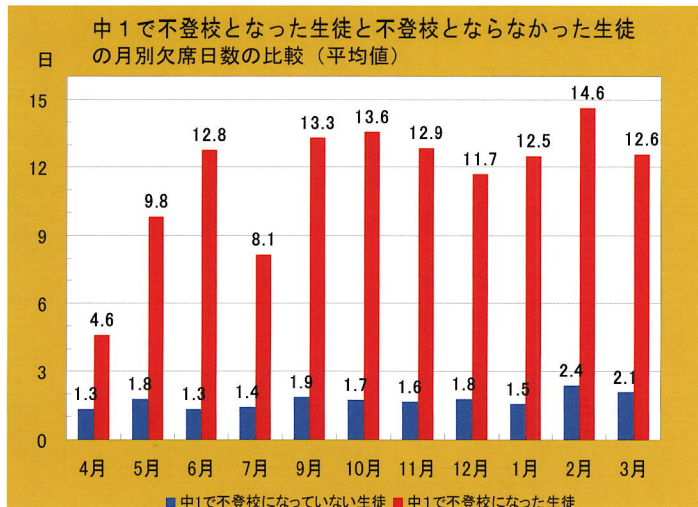
ステップ 5

2 学期以降の対応

2 学期以降の課題

全生徒の月ごとの欠席日数の平均を見ると、5月の連休後や夏季休業後に欠席数が増加する傾向にあります。また、不登校とならなかった生徒の月ごとの欠席日数の平均が3日を超えることはありません。つまり、ひと月3日の欠席は、不登校の傾向を示すサインとなります。

小学校時代に「不登校経験なし」や「中間」群の生徒であっても、友人関係や学業不振を原因として、夏休み明けから休み始める場合があります。欠席が連続したら、必要に応じて対応チームを結成し、対応を開始することが必要です。



西東京市立学校不登校対策モデル校データによる
西東京市教育委員会調べ（平成18年度）

月累積欠席が3日を越えると要注意

スクールカウンセラーや専門機関と連携しましょう

個々の生徒の抱えている背景、欠席が連続している理由等により対応が異なります。早期に対応チームで「見立て」を行い、共通認識をもって、対応方針を決めましょう。その際、ケースに応じてどの立場の教員がどのような役割を担うか、いつまでに何をするのか等を明確にしておくことが大切です。

進級時には、管理職を中心に保護者と面談し、アドバイスをしましょう

校内での対応方針や指導方針について、保護者と共通理解を図りましょう。また、保護者が困っていることや悩みについても耳を傾け、家庭でできることや相談機関について助言しましょう。

不登校になってしまった生徒への対応

「行きたくないから行かない」という葛藤が見えないタイプ

自己を見つめ直し、問題に向き合うためには自ら「悩む」ことが必要です。そのためには、信頼関係が確立している者が、生徒の「今の気持ち」について傾聴したり、「なりたい自分のイメージ」等を話題にして対話したりして、生徒自身が悩むことができるような働きかけを行いましょう。

家庭の問題から不登校になるタイプ

虐待やネグレクトなどが考えられます。関係機関と連携して、協力を求めながら対応しましょう。

学習の遅れから不登校になるタイプ

心の問題だけでなく、学習面の支援をどのように行うかを学校全体で考え、支援体制を整備し、学習ボランティア等の協力を求めることも視野に入れて対応しましょう。

非行傾向から不登校になるタイプ

行動の背景を見極めた上で、学校全体で方針を確認し、役割分担して対応しましょう。

【専門機関と連携する場合の留意点】

- ◆ 生徒を教育相談等の関係機関につなげる場合には、生徒の状況や相談のタイミングを見計らって行いましょう。
- ◆ 生徒が関係機関に通うようになった場合、連携を密にとり、任せきりにしないようにしましょう。

